MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．２．２６　発行元
第 451 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

山田正紀『僧正の積木唄』

２００２年の作品。読み落としていた本を図書館の閉架書庫から見つけて借り出した。重要なポイントになる本だった。ヴァン・ダインの『僧正殺人事件』の続編という形で書かれているマニア向けの作品である。

読み残しはたくさんある

２００２年当時、私は読書中断期間からかろうじて脱していたものの、仕事の方に多くの時間を取られ、ミステリの方は年に１００冊も読めない状態だった。よって、読み残しの本はたくさんある。山田正紀の『僧正の積木唄』はその代表的な一冊。「いつかは読まなければ…」をやっと実行することができた。

本書は２００２年の『このミス』ランキングでは第３１位。目立たない位置で、その後も大きく取り上げられることもなかったような気がする。日本のミステリの中で、山田正紀はもっと評価されてもいいような気がしているのだが…。

『僧正殺人事件』の続編として

題名を見てわかるように、ヴァン・ダインの『僧正殺人事件』の後に続けて起きた話として作られているのが最大の特徴。そういう意味では『僧正』を先に読んでからでないと面白さは半減する。何しろ、ファイロ・ヴァンスの推理について取り挙げ、マーカム地方検事、ヒース部長と馴染みのメンバーが登場するので。そこに金田一耕助が加わり、次なる事件の捜査に取り組む形になっている。

事件は大恐慌直後のニューヨークで、満州事変後の日本人排斥の流れが渦巻く時期に起きている。『僧正』の舞台だったディラード邸でアーネッソン教授が爆死のような状況で発見され、給仕人としてはたらいていた橋本が逮捕された。彼を助けようと久保銀造が金田一耕助を招へいするという流れになる。

ハメットらしき人物も登場するし、エラリー・クイーン作品への言及もあって、私のようなミステリマニアを喜ばせてくれる。

『積木唄』の歌詞に沿って

『僧正』と言えば「見立て殺人」の典型として有名だが、本書では「積木唄」が登場する。元歌は「ジャック」なのだが、「これはジャップが建てた家に置いてあった…」となっていく。第二次世界大戦前のアメリカの世情がかなり色濃くストーリーに結び付けられている。

金田一耕助の立場は被告人・橋本を助ける役目であり、捜査側ではないので、細かな情報が届くこともなく苦戦が強いられる。「本格もの」としての設定はいくつか設けられているが、大きなものはダイイングメッセージになるだろうか。「アインシュタインの相対性理論」…。

山田正紀のミステリを

山田正紀という作家はなかなかの実力者で、興味深い作品をたくさん生み出している。スタートしたころはＳＦ系統が多く、途中からミステリ路線が増えた。私が最初に「すごい」と感じたのは１９９６年からスタートしたトクマノベルスの『女囮捜査官』シリーズ。その後、いろんな試みをしながら「本格もの」の要素を備えた作品を書き続けている。もっと注目してほしいと思う。

ヴァン・ダイン「僧正殺人事件」

１９２９年。ヴァン・ダインの最高傑作と呼ばれている作品。ここでは詳しく述べないが、「コック・ロビンを殺したのはたあれ…」で始まるマザー・グースの童謡にのって、連続殺人が起きる内容。もちろん、探偵はファイロ・ヴァンスで、支えているのは地方検事のジョン・Ｆ・Ｘ・マーカム。

今野敏『審議官 隠蔽捜査9．5』

１月に新潮社から出た本。シリーズとしては１２冊目になる。小数点の付いた番号の時は短編集である。『小説新潮』などに掲載したものに書下ろしを１編を加えて９編が収録されている。各編は比較的短いが、中身の構成がしっかりしていて、ベテラン作家としての貫録を感じる。多くは竜崎を取り巻いている人達から見た視点で描かれており、竜崎の慣例にとらわれないまっすぐな性格や人物像が感じ取れる内容になっている。竜崎の示す姿が本シリーズの一番のテーマなのだから。

冒頭の『空席』は、竜崎が警視庁の大森署長から神奈川県警刑事部長へ異動になった日の出来事。大森署の貝沼副署長はついつい「竜崎署長だったらどう対処する？」と考えてしまう。ひったくり事件とタクシー強盗が同時に発生。緊急配備が必要になるが、署員の数が足りない。身近な方を優先しようとすると、本部の方からお叱りの連絡が入ってくる。新署長はまだ赴任してこない。副署長としてどう判断すればよいのか…。

以下、竜崎の妻の冴子が推理を試みる『内助』、息子の邦彦の預った品物をめぐる問題の『荷物』、娘の美紀が電車での痴漢氾人を捕まえる『選択』…と続いていく。レギュラーメンバー総出の楽しく読める作品ばかり。あっさりした筆調でありながら、的が定められているので、テンポよく読み進めることができる。